

教育長様

校番092 尾道商業高等学校長

## 「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校 令和元年度 報告書

### 1 研究の概要

研究の目標（※計画書に記載したものを再掲）

次の取組によって、探究活動の場において、課題発見・解決学習を適切に推進し、本校の教育活動に対する学習価値を高め、主体的な学びを促進し、資格等の取得が向上することを旨とする。

- ・尾商学は、PBL（プロジェクト・ベースド・ラーニング・ウィド・スタンダード）の考え方や並びに自己決定理論、社会的学習理論等に基づいて、生徒の主体的な学習の場となるようにする。
- ・尾商学において、モデルやルーブリックを提示するとともに、探究活動を高めるためのツールを学習させ、探究活動が深い学びの場となるようにする。
- ・年度当初にスタンダードと尾商検定の概要及び尾道商業が求める生徒像を生徒に具体的に提示し、尾商学を通して、課題発見・解決学習が計画的・系統的に推進できるようにする。
- ・本校の教育活動全般で取組まれる課題発見・解決学習を推進し、尾商学がその取組の成果を統合した場となるように教育環境の整備を図る。
- ・尾商学において、チュータリング・システムとして、IDパスポートを利用した個別の指導・支援を定期的に行えるようにする。

研究内容（※対象、時期、方法を含む）

○総合的な探究（学習）の時間等における「探究的な学習」の充実について

・組織の改善

組織を改変し、プロジェクト委員会（以下「委員会」と略す）の機能を強化し、昨年度の構成員に学年担当2名を加え、運営の中心に据えた。他方、委員会で協議したモデルをもとに学年会で工夫・改善して、クラス担当がクラスの実態に合わせて工夫・改善できるようにした。授業後は、学年会と委員会で、取組状況や指導上の工夫等の共有化を図った。授業の担当者を担任と副担任の2名体制にし、尾商学の企画・運営が生徒の実態に合わせて効果的にファシリテートできるようにするとともに、IDパスポートを活用しスタンダード（資格、資質・能力）の指導を行ったり、生徒指導などの内容を含んだ尾商検定の活用をしたりし易くした。

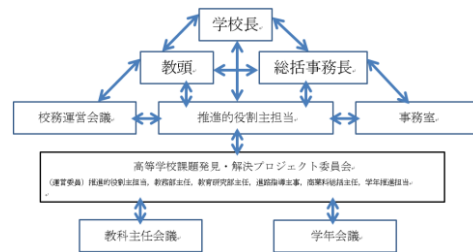
・探究のプロセス

探究のプロセスとして、1年間を3つのフェーズに区分し、右図のように、4月～6月がキャリア設計フェーズ、7月～11月が個人探究フェーズ・グループ探究フェーズ、12月～2月が発表フェーズとした。全体を通して、学習の構造化を図り有能感を高め、ワークシート等を用いて深い学びとなるようにした。またキャリア設計フェーズを中心に、探究テーマや目標、計画等を設定するとともに、探究において深い学びになるように探究ツール（思考力、分析力、創造力、発表力等）を学習し、探究に必要な知識・技能を身に付け深い学びになるようにした。

・探究テーマ

探究テーマを考えさせる場合、ワークシートを使って、自己や社会に関わる問題を考えさせ、その中から自己や社会にとって役立つ課題を発見し、自分で探究テーマを決めて（自己決定し）仮説を設定し探究方法を工夫し、提案することを想定した探究をするようにした。

また、教師も探究のテーマについてイメージが持てるように、探究のテーマのモデルを示した上で、全教師にテーマとして適当なものを書き出してもらい、投票を行った上で、委員会で探究テーマでのモデルを決め、教師と生



月	フェーズ	学習内容	例		
			プロジェクト	ツール	学習場面
4～6	キャリア設計	・テーマ設定 ・探究の企画・設計 ・仮説検証 ・心マップ ・IDパスポート ・ツール（思考、創造、分析、発表、等） ・中間発表			
7～11	探究（個人・グループ）	・調査 ・個人探究 ・中間発表 ・グループ探究 ・外部資料	個人探究 	グループ探究 	学習場面 
12～2	発表	・全校パネル発表（異学年交流） ・小論文作成 ・尾商検定 ・次年度計画 ・提案型	小論文 	ポスターセッション 	

徒に配布した。

・振り返りの推進

生徒、教師、学年会、委員会で振り返りを行った。振り返りにおける評価は、形成的評価を行い、現状のよかったところと課題を考えるとともに、次の計画を考えるようにした。尾商学での指導上の工夫について、対話によるファシリテーションの工夫や、生徒が行っている探究のよい例などを共有化した。また、取組における課題等についても共有化した。

・発表

発表は、フェーズごとに行い、深い考えになるような質問をモデルとして事前に提示しておき、発表後は新たにその場で考えた質問を加えて質疑応答を行い、学び合いを行った。異学年交流を実施し、体育館に全生徒が参集しポスターセッションを行った。

○尾商学と他の教育活動との関係について

・教科横断的な取組として、尾商学と他の教科とを関連付けた取組を行い、シラバスに掲載した。

・尾商学だけではなく、他の教育活動（学校行事、教科学習、特別活動、部活動）において、どの資質・能力に焦点化して伸長を図るか考えて、学習内容や学習方法等をどのように工夫するのかについて共有化を図った。

○資質・能力の評価について

・育成したい資質・能力は、全教師が策定に参加し、

半年以上にわたる見直しや試用を経て決定した。

・育成したい資質・能力は、14尺度策定している。しかし個々の授業や単元において振り返る際、学びのための評価（形成的評価）になるように、改善すべき点を明確にして分かり易い評価になるように下位尺度を作成した。

・教科学習等においては、教科の学力に関わる評価に加えて、授業の振り返りのために資質・能力に関わる下位尺度を作成し評価している。こうした評価を通して、育成したい資質・能力がどのようなものであるのか、また、授業方法の工夫によってどのような資質・能力が関与することになるのか明らかにすることができ、授業改善の方法を考える際に生かされている。

今年度の成果と課題

本年度は、昨年度の基本的な流れに基づいて探究の風土を培いながら、探究の質的な高度化を目指した取組を行った。

・教員の資質・能力に対する意識

本推進プロジェクトの開始時（平成30年5月）と令和2年2月に、資質・能力に関する教員の意識調査を実施した。その結果、右図のように資質・能力に関する5尺度（活用可能性、認識、学校活用、指導実施、生徒の資質能力への取組）は、全平均値が伸びており、資質・能力に対する意識が高まっていることが分かった。

・生徒の資質・能力に対する意識

本推進プロジェクトの開始時（平成30年5月）と令和2年2月に、資質・能力に関する生徒の意識調査を実施し分析を行った結果、資質・能力に関する2因子（取組因子、有用性因子）構造であった。有用性因子を説明変数とし取組因子を目的変数として正準相関分析を行ったところ、半数程度の生徒について、資質・能力に関する意識構造が次のように変化していることが分かった。平成30年度5月段階では、半数程度の生徒は、資質・能力について理解し有用性を認識していても、資質・能力の伸長に向けて取り組んでいなかった。しかし令和2年度になると、半数程度の生徒は、資質・能力について理解し有用性を理解していると、資質・能力の伸長に向けて取り組んでいることが分かった。この2年間に於いて、大半の生徒が資質・能力に対する取組の態度を大きく改善させたと考えられる。

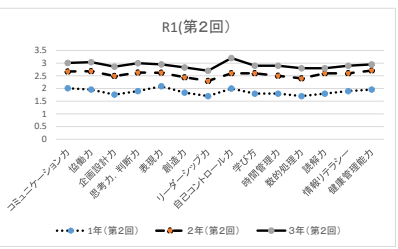
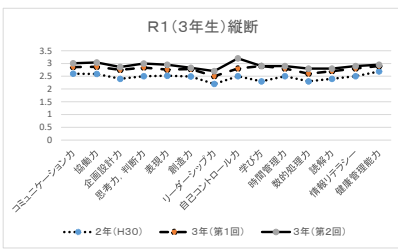
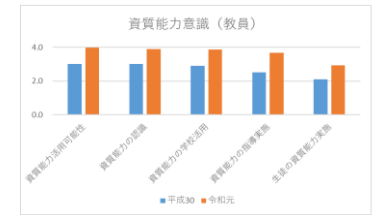
・資質・能力の評価の伸び

右図のとおり、本校で育成したい資質・能力の14尺度は、横断的にも縦断的にも伸長していることが分かった。

Table with 4 columns: ファシリテートや対話による工夫, 生徒が行った探究等のよい例(1), 生徒が行った探究等のよい例(2), 生徒が行った探究等のよい例(3), 本年度の取組における問題、課題、改善すべき点等

Table with 2 columns: 自己評価, 事後の成長(どのようなことが実現できたか)と今後の課題(どのようなことを実現したいか)

Table with 11 columns: 資質・能力, 11, 12, 13, 14, 第1資質・能力, 第2資質・能力



このことは、本校で育成したい資質・能力は、本校教育によって育成できていることを示している。このことはまた、作成した資質・能力の14尺度は、本校で育成したい資質・能力を測定できることを示している。

他方、本年度、取組の上で11の課題が残った。第1に、主体的な教育と学習指導要領や推進委員会で策定したモデルへの順守とのバランスをとる必要がある。第2に、授業の構造化に比重を置いたために、生徒を信頼しじっくりと探究する時間を取れなかったクラスがあった。第3に、探究では、質問紙調査や社会調査等の検証方法を活用する生徒が少なく、検証方法を身に付けさせる必要がある。第4に、提案型を目指したものの、実際には、提案するグループがほとんど出なかった。第5に、修学旅行や校外研修等で、社会調査や企業訪問等を実施する機会が持てるように提案したが、実現できなかった。第6に、PTAや同窓生を含む外部の方に指導や評価に参加してもらおう希望を持っていたが、実施できなかった。第7に、委員会の組織では、仕事分担が過重になる場合があるとの指摘があった。第8に、キャリアパスポートを活用した資格指導や学習指導等へのファシリテーションができなかった。第9に、尾商検定は、生徒指導部等と連携を取りながら、次年度取組を工夫する必要がある。第10に、探究等のモデルとして使える映像を保存していく必要がある。第11に、個人探究での探究テーマと類似したテーマでグループ探究できるようにする必要がある。

#### 次年度の目標及び取組内容

次年度は、課題発見・解決学習推進プロジェクトの研究開発校としてまとめの年となる。そのため、次の6つのことを目標として取組んでいく。第1に、他の高校が本校の取組の結果を活用し易いように、成果を本にまとめる作業を行っていく。第2に、次年度より、記述式の評価を導入するために、フェーズごとに評価システムを作成する。第3に、探究は、21世紀に活躍できる人材を育成することを重視し、グループ学習を中心として行い、個人探究を行うのであれば、個人探究でのテーマに沿ったグループ探究が構成できるように配慮する。第4に、探究テーマや仮説設定、探究方法、探究の状況について、外部の方から指導を受けたり評価を受けたりできるような機会を設定する。第5に、学年会と連携し、クラスでIDパスポートを活用して、資格スタンダードや資質・能力スタンダード、教科スタンダードに関する取組が着実に実行されるようにする。第6に、エビデンス・ベースでの資料を作成するために、毎回の振り返りシートや動機付け調査などを着実に実施する。